



2016年(平成28年)

2月号(No. 849)

公益社団法人

日本山岳会

The Japanese Alpine Club

定価1部 150円

会員の会報購読料は年会費に含まれています

URL ● <http://www.jac.or.jp>e-mail ● jac-room@jac.or.jp

人と山を愛した谷口けいの43年

事故一報が入ったのは昨年12月21日午後。北海道、大雪山系・黒岳北稜を登攀後、山頂付近から滑落。翌日心肺停止の状態で見られ、その後病院で死亡が確認された。日本人女性のなかでぬきんでた才覚を表した登山家、谷口けい。日本山岳会学生会部の遠征に同行するなど後進の指導にもあたっていた。

柏 澄子

谷口桂、1972年7月14日、和歌山県にて谷口家の長女として生まれる。「桂」という文字は、いつしか使わなくなり、本人は「けい」と記していた。しかし桂が嫌いなわけではなかったようだ。近い人、「桂は私の木。中国では金木犀を指すんだよ」と嬉しそうに話していた。中国において桂は、「月の中にある理想」を表す樹木とされ、それは常に前向きであった谷口の人生そのものだ。兄と弟のいた谷口は、小さいころから男の子

に交じって外で遊び、女の子の友だちができるのは中学生になってから、と父は言う。また、登山好きの父に連れられ、山を歩いていた。小金高校1年のとき同じクラスになり、以来生涯の親友であった水上由貴に話を聞くと、長い休みを使って、北海道や関西など二人で旅行をした話がたくさん出てくる。またあるときは、流山市から利根川沿いに銚子を目指して自転車を走らせた。銚子まではたどり着かず、日が暮れると、途中の河

目次

人と山を愛した谷口けいの43年・・	1
晩餐会記念懇親山行に参加して・・	4
JAC110周年記念シンポジウム・・	5
「山の日に向けて」山を考える⑧・・	6
日本三百名山登頂シリーズ⑦・・	7
図書受入報告・・	7
東西南北・・	8
活動報告・・	8
資料映像委員会/図書委員会	
支部だより・・	10
北海道支部/東京多摩支部/ 宮崎支部	
図書紹介・・	12
新入会員・・	14
Climbing&Medicine・71・・	16
会務報告・・	17
会員異動・・	18
ルーム日誌・・	18
INFORMATION・・	18
編集後記・・	19

▶日本山岳会事務局(含図書室)取扱時間
月・火・木・・10～20時
水・金・・13～20時
第2、第4土曜日・・閉室
第1、第3、第5土曜日・・10～18時

原で寝袋に入った。そして、卒業してからも二人の旅は続いた。高校3年の夏から約1年間、アメリカのカンザスに留学したことが転機となった。より物事をはつきりと言うようになった。さらに、走ることが好きになったことも、振り返ると大きかったかもしれない。放課後の活動でトラックを走り爽快感を得たと水上宛ての手紙に書いた。元々体育の授業は大嫌いだと断言していた。体育だけでなく、授業で型が決まったことを教えられたり、受験勉強が嫌いだった。けれど、人生に必要なと思うことを学ぶには積極的だった。だから体育の授業は嫌いでも、運動することは好きだった。厳しい登攀やアドベンチャーレースをしながらも谷口は、「トレーニングは

しない」と言っていたが、走ることはだけはしていた。日ごろから近所の公園や、八ヶ岳山麓の家に移ってからは、天女山に向けて走っていた。翌年夏に帰国し、ひとりだけの卒業式を終え、そして実家を出た。大学受験浪人した水上が通う予備校にときどき姿を現し、一緒に受講することはなかった。ここでも大学に入るために勉強することに疑問を持ったようだ。1年遅れて明治大学文学部(二部)に入学。入学後に谷口が選んだのはMC TC(サイクリスト・ツーリングクラブ)。当時の文集『ベルエポ』を繙くと、国内外をたくさん旅行し、バイクや自転車を使って走っていたことがよくわかる。同期であり主将を務めた里見卓也によると、

「男顔負け」だったようだ。通称「ダ
ンキャ」と呼ばれる、男子部員だけ
がテントを積んでキャンプをしな
がら長いツーリングに出る合宿に、
女子ひとりで参加したり、男子部
員限定のファストラン（八王子市か
ら糸魚川までの300 kmを走る）
に出ていた。3年生になると駿河
台キャンパスの支部長になった。
「自分がやりたいと思ったことに
一所懸命になる人、担ぎ出されれ
ば、きつちりとリーダーシップをと
る人、明るくて女子部員の憧れで
もあった」と里見は振り返る。『ベ
ルエポ』には、思いのたけを語った
文章が多い。「りゅうねんのすゝ
め」そして卒業時には「これからの
少女たちへ」。「何をやるにしても、
あたしは絶対後悔はしなかったし、
逆に幸せを感じたし、自分自身が
信頼できるようになってきたん
だ」と書いている。いつのときも貪
欲で前を向き、大学生活を終えた
ときにはすでに、自分自身を確立
させていたのかもしれない。

メッセンジャーのアルバイトもし
た。バイト先の仲間たちで「ニチエ
ボー」という登山サークルを作っ
た。初年はトレーニング山行、次
年に大キレットを目指したが天候
不順で途中下山、3年目で燕岳か
ら槍・穂高を繋いだ。やがて岩壁
も氷雪壁も登りたいと思うようにな
り、門をたたいたのが京葉山の
会。登山用具店ジャンダルムの2階
にあった食堂を切り盛りする服部
夫妻に相談した結果だった。ニチ
エボー時代からの仲間である小川
弘資も一緒に入会し、頻繁に山行
をとにもするようになった。ある
日、甲斐駒ヶ岳鋸尾根に1人で登
りに行き、雪に閉じ込められ遭難
騒ぎになったこともあった。この
ころの谷口のことを、私も断片的
に覚えている。まだまだ怖いもの
知らずで手加減がわからず、突っ
込んでしまう感があるころだった。
やがて小川は佐藤佳幸なども交
えてアドベンチャーレースにも参戦。
メンバーに女性ひとりを加える規
則があったサロモンクロソアドベン
チャーのとき、彼らは谷口を誘っ
た。2000年の岐阜大会だ。や
がて谷口は、日本におけるアドベ
ンチャーレースの先駆者である田
中正人率いるイーストウインドの
メンバーになり、国内外のレース
に多数出るようになった。「対等
の力を持つ者同士でチームを組み
たい」と「大和撫子旋風」という女

性チームも作った。その後も谷口
は年に1、2度はこれぞ楽しいと
思うレースに出ていた。競争は嫌
いという谷口であったが、アドベ
ンチャーレースの仲間たちのこと
は大好きだった。「気持ちのいい
人たち」といつも語っていた。そし
て、「アドベンチャーレースで昼夜
問わず行動し続けることを身に着
けた。夜間の怖さもあるけれど、動
けるようにもなり、その後の登山
に役立った」と谷口は話していた。
時を同じくして、01年のマッキン
リ、02年の野口健エベレスト清
掃登山隊BCマネージャーなど海
外的高峰にも目を向け始めた。エ
ベレストには2年連続で訪れ、翌
04年のゴールデンピーク、ライラピ
ークから平出和也と組むようにな
る。翌年はムスターグアタを東稜か
ら登り反対側に下山、その足でイ
ンドに入り、シブリンの北壁・北
西稜に新しいルートを拓いた。こ
のときの谷口の話が印象深い。
「ベースに入ってすぐに北壁を見
上げたときは、とても登れないと
思った。けれど何日も眺めている
うちに私自身もその場の環境に慣
れてきて、自然とラインが見いだ
せるようになった。だんだんと山

と友だちになっていくような感
覚」と。しかしこの登山は失敗でも
あった。二人とも凍傷になり、平
出は足の指を失った。帰国後平出
は、谷口に「反省会をしよう」と言
った。それを谷口はとても喜んだ。
反省会は、次を望む前向きな行為
だ。それを谷口は喜んだのだろう。
08年に平出とカメット南壁初登
攀し、ピオレドール賞を受賞。カメ
ットは隔絶された地にあり、ペー
スからも壁は見えない。そのなか
で安定した粘りを見せ、谷口らは
登攀を成し遂げた。その山頂で
「What's next?」と言った谷口の言
葉を、平出はよく覚えている。二
人で将来のクライミングについて
よく話した。「同じ目線でステッ
プアップできたから、見るもの触る
ものすべての感動を共有でき、同
じ波長で登山ができた。また、二
人ともほかの人とロープを組むこ
とも多く、ほかで得た経験を二人
のクライミングに還元でき、それが
倍増の効果となったと思う」と平
出は語る。その後も12年まで海外
遠征を共にするが、前年のナムナ
ニのころから「厳しい自然とどの
ように対峙するか、弱い自分とど
のように向き合うか」と度々口に



撮影／平出和也

するようになったと、平出は振り返る。平出との登山の多くは、彼が発案したものだだったが、それでも谷口は「まるで自分が思いついた計画のように、僕の計画に上手に乗って集中する力があつた」という。やがて平出は「自分で計画することも十分にできるよ、やってみたら」と谷口に話すようになった。

その言葉があつてかどうかはわからないが、前後して鈴木啓紀とアラスカ・ルース氷河で登り、花谷泰広とカヒルトナピークスを縦走するなどしたのち、14年には和田淳二と再びルース氷河に戻り4本のルートを開拓した。和田との登攀でピオレドール・アジア受賞。

昨年は和田と東ネパールの未踏峰を目指した。同じ山には二度と行かないと語っていた谷口が、来シーズンも和田と同じピークを目指すことにしたのは珍しい決断だった。そのためにカトマンズに装備もデポし、私たちにも早くもその計画の詳細を語り始めていた。その場で全力を尽くす、だから登れなくても同じ場には戻ってこないとしていたが、今回は心に残してきてしまったようであつた。

国内でも多くの登攀を共にした鈴木と言葉が象徴的だった。「心の強さ、人間としての強さがあつた。アルパインクライマーが悪いところにも強いのは当たり前、落ちないのも当然。彼女はたとえ高グレードを登らないとしても、その『当然の強さ』を常に最大限に発揮していた。それが彼女の強み」と。

谷口は社会性のある人物だと思ふ。I W N Cという野外活動も活用した企業向け人材組織開発を行なう会社で、ファシリテーターの仕事をはじめたのは2000年。同僚の和田祐司は、「彼女の生き様が参加者たちに大いなる刺激をもたらした」という。アルパインツァーサービスのツァーリーダーの仕事も長

い。同社社長の芹澤健一は「類まれな人物。彼女の手にかかればどんなお客様も山旅を大いに楽しんでくれる。誰に対しても、またどんな国や文化に対しても、常に自分がニュートラルな位置にいる。だからどんな状況下でもうまく対処し、切り抜かれる。その才覚は元来具わっていたのだらうけれど、ここ数年際立ってきた」と。

日本山岳会との出会いは、14年の学生部女子ムスタン登山隊に指導者として同行したことだ。メンバーのひとり長谷川恵理は、「キャラバン中に進退窮まったとき、私たちが2日間かけて話し合うのをじっと待っていてくれた」と当時を語る。初めてのヒマラヤが谷口と一緒に登ったことは、彼女らにとって一生の財産になるだろう。

享年43。人生を四季にたとえろとしたら、初秋だろうか。夏の日差しが優しく残るなか黄金の稲穂が波打つ田で、収穫期を迎えていた。43年間ひとつひとつ積み重ねたものを、谷口は大切に手に取り始めていた。紅や黄に色づく山々を歩く輝かしさも味わっていた。そして、これからのクライミングと人生についてごく近い人に語っ

ていた。長生きしてくれたら、どんなにチャージングなおぼあちゃんになったらう。自分の子どもには厳しくしても、孫は目に入れても痛くないと笑ったかもしれない。同じく43歳にある水上は若きころの谷口の手紙を読み返し、彼女が自立したい一心で独り暮らしを始めた当時を振り返った。「この歳になればわかる。二十歳の彼女はただただ闘っていた。がむしやりに生きていたんだ」と。若くして立派な生活者でもあつた。

「我(われ)を通す」という言葉を使ったのは鈴木だ。自分の人生を自分の手で作り、自分の考えを貫くとき、常に彼女には確固たる自分があつた。だから、我を通すときにも周囲は協力的だったし、愛された。ここ数年、谷口の顔たちは一段と凛々しく、鮮やかになってきた。確かに歳を重ねた人の表情だった。自分を求めるなかで選び抜いた人生は美しく、それは彼女が仲間と描いた登攀にも、また仕事の姿勢にも、人への愛情にも表れていた。真剣に物事と関わる者には、周囲もサポートする。心から人を愛する者は、人からも深く愛される。そんな人生だった。

Mountainering report

晩餐会記念懇親山行に参加して

福井支部 亀田友紀

年次晩餐会の翌日、山行委員会主催の記念懇親山行に参加させていただいた。今年は本栖湖パノラマ台中之倉峠という富士山眺望コース。

集合場所からバスで富士五湖の一つである精進湖畔の登山口へ移動。バスから降りると目の前には雄大な富士山が迎えてくれた。準備を整え、パノラマ台入り口から登り始める。落葉した木々の間から精進湖を眺め、緩やかに登っていくこと約30分、突然視界が開けた。そこからは「子抱き富士」として有名な富士山と大室山を眺めることができた。その後も緩やかな尾根道や沢に架けられた橋などを通り、登り始めから1時間半ほどでパノラマ台に到着した。山頂からの眺望はとても素晴らしく、180度以上のパノラマのなかでもやはり裾野を広げた富士山と、眼下に広がる青木ヶ原樹海は圧巻であった。大展望を眺めながらここで昼食を兼ねた休憩と集合写真を撮影した。



富士山を背景に記念撮影

休憩後、次に向かったのは千円札裏面の逆さ富士の眺望地、中之倉峠。登山道はふかふかの落ち葉が積もり、カサコソと音を立てながら歩くのは気持ちがいい。木々の間から姿を見せる富士山とともに、なだらかな稜線を軽快に歩いていくこと約1時間、中之倉峠に到着。富士山展望台は狭かったため順番に入れ替わりながら、千円札と同じ構図をカメラに収めようと何度もシャッターを切る。あいくの曇り空だったので逆さ富士

は望めなかったものの、やはり展望台からの富士山と本栖湖は絶景であった。

十分富士山を堪能したところで下山開始。つづら折れに下つていき、30分ほどで本栖湖側に下ってきたが、最後にまた目の前に雄大な富士山が現れ、足を止めてしばらく眺めていた。登り始めから下山まで、富士山とともに歩いた今回の記念山行。天気にも恵まれ、最後まで雲に隠れることなく綺麗な富士山を堪能することができた。また、登山道もよく整備されたコースで、総勢100名近い方々と会話や景色を楽しみながら歩かせていただいた。企画してくださった山行委員会の方々に感謝したい。

下記の通り「谷口けいを偲ぶ会」を開催します。ゆかりのあった方々皆さまに広くお集まりいただきたくご案内申し上げます。

発起人 日本山岳会(尾上 昇)、パタゴニア日本支社(辻井隆行)、アルパインツアーサービス株式会社(芹澤健一)、国立登山研修所友の会(渡邊雄二)、株式会社IWNC(石川隆久)、日本アドベンチャーレース協会(田中正人)、エベレスト清掃登山隊(野口 健)、「谷口けいを偲ぶ会」実行委員会 順不同(上記ほか多くの方々にご協力いただいております)

【期日】2016年3月13日(日)
16:00から18:00まで

【会場】東京都青山葬儀所 〒107-0062東京都港区南青山2-33-20
電話03-3401-3653

【会費】5,000円(会費制とさせていただきますので、御香典は辞退させていただきます)

【喪主】谷口尚武(父)

【お申し込み】<http://kei313.net/>

【お申し込み締切】2月28日(日)

【お問い合わせ】谷口けいを偲ぶ会 実行委員会 info@kei313.net
ファックス 03-3508-2529 (アルパインツアーサービス株式会社内)

Symposiums

J A C 110 周年記念シンポジウム

「御嶽山噴火について考える―体験者の声を聞く―」を主催

医療委員会担当理事 野口いづみ

医療委員会は110周年記念事業として、昨年6月の名古屋夏山フェスタと11月の松本山岳フォーラムに参画したが、今回、東京で御嶽山シンポジウムを主催した。

12月4日(金)に、慈恵医大高木2号館南講堂にて、「御嶽山噴火について考える―体験者の声を聞く―」(18:00~20:45)を開催した。参加者は約140名で、会場はほぼ満席だった。J A C 会員は約50名、地方からの参加者は10名程度、女性が6割を占めた。



(写真左から) 福岡孝昭氏、小川さゆり氏、上條剛志氏

浜口欣一医療委員会委員長が司会を担当し、最初に御嶽山噴火被災者へ黙祷を捧げた。重廣恒夫監事による開会の挨拶後、野口がシンポジウム開催の経緯を紹介した。

まず、福岡孝昭科学委員会委員長が、「火山噴火と安全登山」のテーマで講演をした。御嶽山は完全な静穏状態ではなかったが登山規制はされていず、水蒸気噴火だったために予知が難しかったという。噴火後、予知体制と情報伝達が改善され、噴火の緊急情報が携帯電話にメール送信されるようになり、関係省庁の救助体制の整備が行なわれているようだ。百名山の1/3が活火山。活火山には危機意識を持つて登山し、火山ガスに注意するとともに、噴火に遭遇したときの安全対策として、火口から遠ざかる(尾根や高い所を下り、谷を下つてはいけない)、爆発には休止時があるのでタイミングを見計らつて山小屋・シェルター・岩陰へ避難する、ヘルメット・ザックをかぶ

る、濡れ手拭いで口・鼻を覆うなどを挙げた。火山の学習の必要性を説いて締めくくった。

次に、小川さゆり山岳ガイドが、「御嶽山噴火に対する思い」と題して、噴火時に山頂にいながら生還できた経過を淡々とした語り口で詳細に報告した。噴火直後の多くの写真とビデオは臨場感を与えた。被災者が多かった理由として、正常性バイアス(逃げ遅れの心理..自分は大丈夫と思つてしまう)と多数派同調バイアス(集団心理..周囲と同じ行動をとれば大丈夫と思つてしまう)を挙げ、これらにとらわれないことが必要であると述べたが、正常性バイアスにとらわれない者は10~15%という。生死を分けたものは、危機意識を持つて、瞬時に判断し、命を守る行動に移れたかどうかであり、自分の命は自分で守る意識が重要と強調した。小川氏の講演の内容は、運だけではなく、冷静な判断力があったことを示していた。また、自分の言葉で語ることでできる貴重な生き証人という印象を与えた。最後に、噴火の翌日に山頂で活動を行なった唯一の医師である上條剛志氏が、「御嶽山噴火災害にお

ける医療活動」を報告した。写真から痛ましい現場の惨状がうかがえた。医学的には、被災者は低体温症によると思われる例が少なくなかったこと、岩陰に隠れて亡くなつていた者は反対側の身体に損傷を受けていたことなど、予想外の知見だった。D M A T の指示で1時間しか滞在が許されなかったことが残念だったが、生存者に対する診療だけではなく、被災者のトリージ(重症度、救出順を決める分類タグ付け)を行なうことと、救助者の医学的サポートなど、多方面の医療の需要があつたという。災害医療と山岳医療の連携活動は初めてで意義は大きく、今後、山岳の現場で傷病者を救える体制の構築と、医学的検証によつて得られた知見が活かされることが必要と強調した。

3人の演者がそれぞれの立場から熱のこもつた講演をし、改めて御嶽山噴火が学ぶことが多い災害であつたことを浮き彫りにした。講演後に活発な質疑応答が行なわれた。小林政志会長が感想を述べ、浜口委員長が閉会の挨拶をした。模様は12月6日の読売新聞に報道された。

「山の日に向けて」山を考える⑧ 山の本を手にとってみよう

近藤雅幸

たまたま本屋で見かけた本。ただ、どうしても本の題名が気になって仕方なかった。『山の絵本』。山の本であるようなそうでないような、変な題名だった。

その本は『尾崎喜八詩文集』というシリーズものの1冊だった。シリーズのほかの本も書店の同じ書棚に並んでいたはずだが、今思い返してもほかの本の記憶はない。

著者の尾崎喜八の名前は、山の仲間から耳にしたことがあった。山に登る詩人ということだったが、それまでその作品を見たことは一度もなかった。

その本を手にとって、画から取り出しべらべらとめくってみた。すると、気恥ずかしくなるほどの詩情、散文詩調の美しい文に乗って、古き良き時代の高原や山を彷徨する詩人の姿と、美しくも抒情的な風景が見えるような気がしてくる。それまでの山登りにはなかった、新しい「山」にすっかり魅了され、気がついたらその本を買って求めている。

これが初めての山書との出会いである。それまでは山に関する本といえばガイドブックと登山のノウハウ本。山はただがむしやりに登るものと思っていたが、『山の絵本』との出会いが、山登りの概念を変えてくれた。それからの山はそれまでよりずっと豊饒でみずみずしいものになり、あるものすべてをゆっくり味わいながら山に登るようになったような気がする。

『静かなる山』。この本との出会いも、山の嗜好を変える転機になったように思う。

5人の低山藪山派の大家による紀行集だが、それまで名前も聞いたことがなかったような山ばかりが登場する。題名のとおり、登る人のいない静かな山を採り上げているのだから当然のことなのだが、それまで好んで登ってきた高山、岩稜などとはまったく違った世界が、本の中にいっぱい詰まっていた。また、文章家としても名高い5人の著者。それぞれの個性が目につかぶような文。それがただの藪

山に過ぎない山々を、魅力的でとても楽しい山として描写している。『静かなる山』に出てくる山を登るようにすることは、この本を手にとったときから決まっていたのかもしれない。

その後は静かな山に取りつかれて、身も心もすっかり低山藪山派になってしまったが、この本と出会わなければ、そんなこともなかったに違いない。

高みと困難を目指す山登り。百名山を巡る山登り。それもいいだろう。しかし、時には山岳会の図書室や山の本を扱う書店にも足を運んでみよう。どんな本がそこにあるかはわからないが、たまたま手に取った本が、山への向き合い方や嗜好を変えてしまうこともある。そうでなくても、本は読むだけでその人の「山」を豊かなものにしてくれる。

今年から始まる「山の日」。夏真っ盛りの暑さを逃れて高山で涼むのもいい。沢で水を浴びて、帰りの車中で冷えた缶ビールを一杯もいい。しかし、クーラーの効いた部屋の中で山の本を繙くのもいいのではないだろうか。とにかく、そんな日こそ山の本を手にとってみよう。

「山の日」メモ

《「マナスル」から「山の日」まで60年、いま未来に伝えること》をテーマにこの7月10日、東京で記念イベントを実施する▼主催は日本山岳会である。戦後復興期のあのころ、日本人初の8000m峰登頂のニュースに日本中が沸いた。山へ向かう列車に若者が溢れた。やがて初登頂時代が去り、バリエーションも登り尽くされ、15年ほど前から山ガールが流行語になって今に続く▼国民の祝日「山の日」ができた。公益目的を持つ「山の日」制定運動を提唱し、ほかの山岳団体に呼びかけて幅広く活動の輪を広げたわれわれは、未来に向けて何ができ、何をなすべきかが問われていよう▼祝日施行の記念すべき年ではある。しかし、できることは限られている。足元を見つめ直し、仲間を増やし、支部間の交流を深めて刺激し合うこと。近くスタートする神奈川支部を含めて33支部。まずはブロック間の情報交換を盛んにしたい。地域振興の自治体、企業などが視野に入れば、活性化への道は大きく開けると思う。

(成川隆顕)

日本三百名山登頂シリーズ⑦

霊峰七面山から八紘嶺へ縦走、梅ヶ島温泉に泊まり山伏に登頂する2泊3日展望と新緑の山旅
参加者募集！

「日本三百名山登頂シリーズ」という創立110周年記念事業の山行企画第7回のご案内です。今回は富士の展望台・七面山と安倍奥の最高峰・山伏に登り、宿坊宿泊体験と名湯・梅ヶ島温泉の湯を楽しむというプランです。JAC会員以外の方も参加できます。

本ツアーには日本山岳ガイド協会のガイド資格を有するツアーリーダーと、インタープリター（解説員）として当該山域に精通しているJAC支部会員が、また、サポーターとして本部山行委員会スタッフがそれぞれ同行します。

【第7回日程・行程など】

期間 5月25日（水）～27日（金）
集合解散 下部温泉駅9時30分集合、静岡駅19時解散予定

行程 1日目／下部温泉駅⇨羽衣橋―表参道―敬慎院泊

2日目／敬慎院―七面山―希望峰―八紘嶺―梅ヶ

島温泉・梅薫楼泊

3日目／梅ヶ島温泉―山伏登山口―蓬峠―山伏―蓬峠―山伏登山口―梅ヶ島温泉⇨静岡駅

宿泊 七面山・敬慎院（宿坊）
梅ヶ島温泉・梅薫楼

食事 朝2回、昼1回、夕2回付き（2日目は昼用の行動食をご用意下さい）

保険 国内旅行保険に各自必ずご加入下さい。

参加費 4万3800円（現地移動交通費、現地宿泊代、食事代）

定員 16名（最少催行人数12名）

申込み・問合せ

〒105-0003 東京都港区西新橋2-8-11 第7東洋

海事ビル4F アルパインツア―サービス（株）

TEL 03-35503-0223

FAX 03-35508-2529

日本三百名山登頂シリーズ係まで担当⇨相山、渡邊、佐々木、児玉

✉ kokunai@alpine-tour.com

*お申込みの方に詳細なご案内をお送りいたします。

（創立百十周年記念事業実行委員会／山行委員会）

図書受入報告(2016年1月)

著者	書名	頁／サイズ	発行者	発行年	寄贈／購入別
尾崎芳（編）	登歩渓流会 活動記録総覧	688p／30cm	登歩渓流会	2015	発行者寄贈
鶴木修一	私の山行ノート	312p／21cm	新潟日報事業社	2015	著者寄贈
彌彦神社写真集出版委員会	越後一の宮 おやひこさま：彌彦神社写真集	108p／24cm	BSN 新潟放送	2013	小林政志氏寄贈
沢野ひとし	人生のことはすべて山に学んだ：沢野ひとしの特選日本の名山50	254p／21cm	海竜社	2015	出版社寄贈
全国「山の日」協議会（編）	全国「山の日」フォーラム実施報告書（2015.3.28～29 @ 東京国際フォーラム）	120p／30cm	全国「山の日」協議会	2015	発行者寄贈
五十嵐敬喜・他	日本固有の防災遺産 立山砂防の防災システムを世界遺産に	157p／21cm	ブックエンド	2015	飯田肇氏寄贈
西本武志	人と山：評論・随想	447p／22cm	桐書房	2015	著者寄贈
中村保	ヒマラヤの東 山岳地図帳：日本山岳会創立110周年記念出版（日中英3ヶ国語表記）	333p／32cm	ナカニシヤ出版	2016	著者寄贈
John Biggar	The Andes [4th ed.] : A Guide for Climbers	352p／21cm	Andes	2015	購入
Christopher Norton (ed.)	Everest Revealed : The Private Diaries and Sketches of Edward Norton	156p／24cm	The History Press	2015	購入
S. House, S. Johnston	Training for the New Alpinism : A Manual for the Climber as Athlete	464p／26cm	Patagonia	2014	購入
John Porter	One Day As A Tiger : Alex MacIntyre and the Birth of Light and Fast Alpinism	230p／24cm	Vertebrate Publishin	2014	購入
Andy Hall	Denali's Howl : The Deadliest Climbing Disaster on America's Wildest Peak	252p／24cm	Dutton	2014	購入
Thomas Huetlin	Reinhold Messner : My Life at the Limit	253p／23cm	Mountaineers Books	2014	購入

東 西 南 北

立山の俳句を世界に発信 された皇太子様

西山秀夫

平成27年11月18日、ニューヨークの国連本部で「水と災害に関する特別会合」で皇太子様が英語で基調講演された。特別会合は水と災害について理解を深めるために開催。メディアでは朝日新聞と北日本新聞が詳細に報じたが改めて紹介したい。

テーマは「水と人とのより良い関係を求めて」という。水と人との歴史的な関わりや教訓を語られた。日本の和歌を紹介しながら日本人の水に対する気持ちを35分間にわたって述べられた。私が特にペンを持つ気になったのはその中身である。講演の最後で、皇太子様が「私が好きな前田普羅(1884-1954)の俳句を読んで締めく

くりたい」と言われ、英語で俳句を読み上げられた。宮内庁のHPを検索すると以下の英文が紹介されている。

Overlaying the quarter
Is Mt. Tateyama in the
background

There, water is sprinkled
To cool the streets
普羅ファンならずとも名句とされる、

立山のかぶさる町や水を打つ

前田普羅

であった。

「立山が覆いかぶさるように聳える富山の町で、人々が夏の暑さを和らげるために通りに水を打ち、涼を取っている情景が浮かぶ。山から流れ出る水は飲み水として、あるいは農業のために私たちに多くの恵みをもたらします。しかし、水は時に不足したり多すぎたりし、人々に大きなダメージを与えます。

会員の皆様のご意見、エッセイ、俳句、短歌、詩などを掲載するページです。どしどしご投稿ください。(紙面に限りがありますので、1点につき1000字程度をお願いします)

この句にあるように、人々がどこでも水とともに平和にゆつたりと過ごせる世界を実現できるような、私も今後とも取り組んでいきたいと思っています。ありがとうございました。」と結ばれ、世界に向けて発信されたことである。

そのとき会場に、呉羽山から立山連峰を撮影した写真も映し出された。

前田普羅は大正昭和にかけて活躍した俳人であった。小伝によれば、

「大正十三年五月灰燼の横浜より未知の越中に移る。越中移住後は俳句の機会多かりしも、職務多忙のため之に傾倒する能はざりき。昭和四年『辛夷』の経営に当る、且つ越中に移り来りて相対したる濃厚なる自然味と、山嶽の威容とは、次第に人生観、自然観に大なる変化を起こしつつあるを知り、居を越中に定めて現在に至る。」とある。紹介された俳句は富山に赴任したころに詠まれた。

活 動 報 告

日本山岳会の
各委員会、同好会の
活動報告です。

資料映像委員会

「第19回全国山岳博物館等 連絡会議」開催

2015年11月28日(土) 13時から17時まで日本山岳会集會室において開催された。

参加館は7館9名。市立大町山岳博物館(長野)、富山県「立山博

物館」(富山)、松本市山と自然博物館(長野)、富山県立山カルデラ砂防博物館(富山)、東京都写真美術館(東京)、岡田紅陽写真美術館(山梨)、秩父宮記念スポーツ博物館(東京)。

本会からは委員・理事10名が参加した。今回の会議の内容の主なものを紹介する。

ゴジュンバ氷河調査隊日程と募金について

大森弘一郎

110周年記念行事のゴジュンバ氷河科学調査隊ですが、本隊もサポート隊も同じ行動にします。35日間の行動は、まずエベレストの展望が良い5thレークまで行き、氷河の移動測定の定点を置く、チャドテンの頂上に観測定点を設置する、氷河池にボートを浮かべて水深を測るなど、チョーオユーからの氷河のモレーン上にBCを設けて行動します。

電波衛星や音波による測深や、電顕や、最新の機器を駆使して氷河湖の生成を予測するための調査をします。調査に参加するのも、絵を描くのも歓迎です。参加費はJACの補助があつて49万円です。羽田出発は4月27日。カトマンズでのマナスル登頂60周年記念会に参加して、5月1日にカトマンズ出発。ゴーキョから5thレークまでテントを延ばします。帰国は6月1日の朝。まだ参加可能です。氷河池→検索で詳しい計画をご覧ください。問い合わせは zero@qb3.so-net.ne.jp 大森まで。

なお、本調査隊は大変厳しい財政事情のため、計測機器の精度、電源、衛星データ購入、助手シエルパなどが不十分なかで進めております。隊へのご寄付をいただけると大変にありがたく存じます。

【市立大町山岳博物館】は、「ライチョウの絶滅防止への取り組み」



集会室での参加メンバー

山の歴史や自然を知って「町づくりに生かすための活動」等が発表された。

【富山県の立山博物館】は、北陸新幹線開業記念事業として「立山の至宝展」をはじめとする数々の事業への取り組みと、活動上発生する「宗教行為の問題」に立ち入らない配慮等の課題が発表された。

【松本市山と自然博物館】は、広大なアルプス公園内に立地することから、公園と連携した「自然観察会」また、本館となつてゐる松本市立博物館との連携事業等が発表。

【立山カルデラ砂防博物館】は、北陸新幹線開通が意に反して来館者減少になつてしまつた対策、また、会議に出席できなかった黒部市歴史民俗資料館の紹介を行なつた。

【東京都写真美術館】は、現在施設のリニューアル中で、照明の全面LED化も推進中とのことで、それについて各館から多くの専門的意見が論じられた。

【岡田紅陽写真美術館】からは、写真家・岡田紅陽が残した多くの作品の整理に奮闘している現状の報告がなされた。

【秩父宮記念スポーツ博物館】から、新国立競技場建設に伴う引越と資料整理への対応の難しさ、新施設への再入館は、現段階では未定状態にある等の報告があつた。

今年も大変有意義な内容であつたが、次回は20回目を迎えるので、多くの参加を得てさらなる充実を図りたい。

(齋藤知茂)

図書委員会

第33回図書交換会報告

今年度の年次晩餐会は、11月末に亡くなつた近藤等名誉会員の告別式と重なつた。近藤さんといえ

ば、前回の図書交換会での「思いがけないサプライズ」が思い出される。「参加者の皆さんに無料で差し上げてください」と80点近い本を送つてくださったのだ。その中に『星と嵐』『星にのぼされたザイル』『天と地の間に』のDVDが入つていたこともあつて、嬉しい大抽選会になつた。その報告を受けた近藤さんはとても喜ばれ「今年の図書交換会にも出したい」とおっしゃつてゐたとも聞いていた。

図書交換会は50年近く前に、松方三郎会長の下、当時の図書委員長の深田久弥氏、委員の小林義正氏や山崎安治氏らから始まつた。その志と精神は、近藤等さんをはじめとする多くの山岳書愛する先輩に受け継がれ、現在に繋がっていることを再認識した出来事でもあつた。

今回の図書交換会は、当日の会場での申込者が100名近くになり、年次晩餐会での開催が4年目にして定着してきたことを実感できた。「地方ではなかなか山の本が手に入らないので、毎年楽しみに年次晩餐会に来ている」という嬉しい言葉をあちこちから聞かれた。また再会を喜び、本を間に

挟んで懐かしい山や本の話がはずんでる参加者の様子は、ほかでは見られない日本山岳会らしさだといえるだろう。

本部行事でありながら、委員会行事は首都圏在住者しか参加できないのが実情であるが、年次晩餐会での図書交換会は、全会員が参加できる数少ないイベントであり、本部と支部を繋ぐ架け橋のような役割も果たしているのではないだろうか。

さて今回の人気本を紹介しよう。一番人気は、16人が申し込んだ『画と随想の本』。訳者(尾崎喜八)のサインが人気の秘密だろう。続いて『復刻版 奥多摩』(宮内敏雄)、『新稿 日本登山史』(山崎安治)に14人、『雲表を行く』(冠松次郎)、『チベットのアルプス』(中村保)、『明治の山旅』(武田久吉)が続いた。

入札本は『朝の山 残照の山』特装本に8500円、『岩と雪 1〜7号』に7000円、『松浦武四郎紀行集 上・中・下』に6500円、そして『山のABC 1・2・3』は畦地梅太郎や串田孫一のサインがあることもあって、3冊で2万5000円の値がついた。

昨年を軽く超える500冊の本もほとんど完売し、その後の本の発送、集金、さらに出品者への返金という実務も終わった。そしていよいよ次の図書交換会である。夏前には会報で次年度の図書交

支部

だより



全国各地の支部から、それぞれの活動状況を、北から南へとレポートします。

北海道支部

「北海道支部創立50周年記念式典」盛大に開催

2015年12月12日、日本山岳会北海道支部創立50周年記念事業の掉尾を飾るイベントとして、札幌市中央区のロイトン札幌で創立50周年記念式典が行なわれ、道内外から会員・会友など1000人が出席。半世紀の節目を祝うに相応しい盛大な式典となった。

出席者には受付で記念誌『日本山岳会北海道支部50年のあゆみ』や記念品が手渡されたほか、会場にはスケッチクラブ会員の絵画作

換会への出品本を募ります。「昨年は出し忘れた」という方、今から出品本をご準備ください。また年次晩餐会で開催できることを、私たち図書委員も願っています。

(三好まき子)

品が展示され、開式を待つ出席者たちは、さまざまな題材、タッチの作品に見入っていた。会場内には会員の著書等の販売コーナーも設けられた。

式典は15時30分に開幕し、西山泰正支部長は式辞で50年の歴史を振り返るとともに、ポスト50周年の取り組みについて語った。続いて来賓を代表して、小林政志日本山岳会会長と小野倫夫北海道山岳連盟会長が祝辞を述べた。祝電やお祝いメールの披露に続いては「50年のあゆみ報告」。支部設立と支部再建の経緯から、中央分水嶺踏査、オホーツク分水嶺踏査、そ

して近年の活動等に至るまで、その当時からよく知る会員が振り返って報告し、式典は幕を閉じた。

その後、会場を隣のホールに移して祝宴が開幕。会場の11のテーブルには、北海道にある「日本百名山」9山と「幻の百名山」2山の名前が付けられた。

支部長挨拶に続いて鏡開き。小林会長と歴代の北海道支部長4人が、支部名を染め抜いた半纏を身にまとい、小槌を振り下ろして菰樽を開くと、会場は一気に盛り上がりを見せた。

祝盃を挙げ、歓談と交流の輪が



支部長挨拶に続いて鏡開きが行なわれた

広がるなか、日本山岳会の本部および全国各地の支部、北海道の山岳団体の関係者が、次々とお祝いの言葉を述べた。2015年入会の支部会員が自己紹介を行なった後、支部会友の方が華麗な祝舞を披露して会場は華やかな雰囲気になった。

祝宴のフィナーレを飾ったのはプレゼント抽選会。登山用品や旅行券など豪華賞品の当選者が呼び上げられ、会場は歓声と笑顔に包まれた。祝宴終了後に開かれた二次会も超満員の盛会となり、最後は白石区のルームで、宿泊する来賓を囲むようにさらに三次会が開かれ、深夜まで宴が繰り広げられた。

(田中 健)

東京多摩支部

「マナスル登頂60周年」を記念し講演会を開催

東京多摩支部は、1月30日、東京・八王子の京王プラザホテルで支部年始晩餐会を開くとともに、「マナスル初登頂60周年」を記念し、日下田実隊員をお招きして講演会を行った。講演に先立って映画「マナスルに立つ」が上映され、一般参加を合わせ153人の参加者は、あの日の再現に感極まる思いを募らせた。

日本山岳会登山隊がマナスルに初登頂したのは三度目の挑戦だった。今西壽雄／ガルツェン・ノルブによる初登頂は1956年5月9日、続いて11日に加藤喜一郎／日下田實が登頂した。日下田隊員は第二・三次登山隊に参加、いずれも食料担当だった。ずいぶん苦労されたようだ。講演会では次のように語った。

当時、ヒマラヤの高山では、食事は普通には食べられないと言われた。しかし、イギリス隊の記録やマナスル一次隊の話の聞くと日本食でいいと分かってきた。それで二次隊は、アルファ米を中心と

した日本食にする計画を作った。食料を梱包し船でカルカッタに送ったところ、隊長の堀田彌一さんが日本食をまったく食べないという。荷物を発送したあとであり困ったが、隊長は大きなチーズを2つ持っていくからいいと言われた。三次隊もすべて日本食とした。

キャラバンの途中では、カレーが多くなる。シエルバも、よく食べた。作るのも簡単だ。ところが、これは後になって分かったことだが、横隊長がカレー嫌いだと言う。遠征中は一言も言わなかった。帰国してから「家では食べたことがない。これからも食べようとは思わない」と。済んだことで、なんともいたしかたない。横隊長というのは、そういう人だった。「ああしろ、こうしろ」とは言わない。隊員の考えに任せる人だった。

講演会場には松田雄一隊員も顔をみせた。続いて行なわれた支部年次晩餐会では106人が参加、マナスル初登頂のニュースに日本中が湧きかえった当時を語り合い、賑やかに懇談した。

(高橋重之)

宮崎支部

もつひとつのウエストン祭

第31回宮崎ウエストン祭が11月2日、祖母山を間近に望む高千穂町五ヶ所の三秀台で、九州5支部から集まった会員約60名と地元住民約20名が参加して開催されました。ところで、現在のウエストン祭以前に、地元山岳会によって「ウエストン顕彰祭」が行なわれていたことはあまり知られていません。そこで当初より関わりを持った一人として、ウエストン顕彰祭から宮崎ウエストン祭へとつながる経緯を明らかにしたいと思います。

昭和33年10月、生前のウエストン師とも親交のあった元会長の横有恒氏が、大分在住の会員・加藤数功氏を伴い、大分県側から祖母登山口の尾平を経て高千穂町に来町されました。高千穂町では町の準備した夕食会に出席され、その席で私が祖母山関係のスライドを上映しながら説明。その話のなかで、ウエストン師の祖母登山の期日が話題になり、私と加藤氏が後日、調査することになりました。以後、五ヶ所の旧家・矢津田さん宅へたびたび伺い膨大な「矢津田日

記」の調査を行なって4年後、明治23年11月6日の日記に「エuston」の名の記録を発見しました。

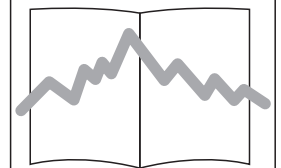
これはウエストン師が初めて日本アルプス登山を行なった前年にあたることが新聞等で大きく取り上げられ、これを機に祖母・傾国定公園の指定記念事業として高千穂町議会が「ウエストン師祖母登山顕彰碑建設特別委員会」を設置し、募金運動に取りかかりました。その間、英国大使館を通してウエストン師生家より顕彰碑に埋め込まれている「ヨークシャ石」の寄贈もありましたが、集まった募金額は予定額にはほど遠く、とりあえず洋鐘のない顕彰碑が昭和41年11月6日に三秀台の地に完成し、除幕式が挙行されました。

翌昭和42年から地元の北稜山岳会により第1回ウエストン顕彰祭(以下顕彰祭という)が行なわれましたが洋鐘のない顕彰碑は寂しく、昭和44年から再び募金を募って3年後にようやく洋鐘が取り付けられ、名実ともに顕彰碑が完成。昭和47年5月2日に百数十名の参加を得て顕彰祭が挙行されました。ところが、この年の第6回顕彰祭を最後に町議会の顕彰碑建設委員

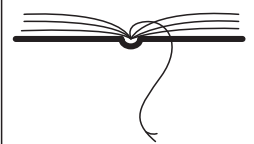
会が解散し、以後は北稜山岳会だけで顕彰祭を続けていました。しかし、同会も解散したので、通算10回で顕彰祭は幕が引かれました。

昭和60年になって宮崎支部が設立されることになり、私は支部発会時の年間行事の検討会で、先に中断したウエストン顕彰祭の復活を念じ支部設立総会に提案して賛同を得ました。そこで高千穂町在住の私が町と交渉することになり、当時の町長が北稜山岳会の最後の会長だったこともあって話は進み、宮崎支部事務局の大谷優氏も交えて話し合いの結果、高千穂町と宮崎支部の共催でウエストン祭を復活することが決まり、第1回宮崎ウエストン祭を昭和60年11月3日に催行しました。

翌61年11月2日には、第4回全国支部懇談会が高千穂町で開催され、翌3日には第2回ウエストン祭が行なわれ、現在に至っています。宮崎ウエストン祭と名称が変わってから今年で31年目となり、ウエストン顕彰祭から50年もの歳月が過ぎましたが、今後とも宮崎ウエストン祭が山岳愛好者全員の行事として、いつまでも続いていくことを願っています。(佐藤光俊)



図書紹介



近藤信行著

田淵行男
安曇野のナチュラリスト



2015年11月
山と溪谷社刊 416頁
四六判上製 2600円+税
定価

州安曇野市には記念館があるが、その作品があまりなく理解されているとは言えない。

『尾根路』『山の時刻』『山の季節』『山の意匠』『山の紋章 雪形』『高山蝶』『北アルプス』『大雪の蝶』『アシナガバチ日本産全種生態』その他、膨大な著作を並べてみれば、どの著作にも山の多様性と重量感が独特の詩情をたたえて息づいていて、そこからは日本の山の言いようのない魅力がわきたつてくる。そして、田淵行男の世界が山岳写真の領域にとどまらず、大きく広いものであるのを理解できる。

本書は安曇野に定住し、その自然と濃密な関係を結ぶことによつてナチュラリストとしての資質が花開き実を結んだその経緯と、諸著作誕生の背景を綿密な記述で表した好著である。

著者は「自然科学の眼をとおして美を探り、美を自然科学にとり

いれてしまう彼の感性の基底に」ある文学性に注目している。またその世界は「記録に重点を置く徹底的な完璧主義」であり、「教育者と芸術家と職人が同居している」とするが、いずれも田淵行男の本質を言い表している。

私自身、田淵行男氏とは編集者としてお付き合いしていたから、読みながらその面影が鮮明に甦ってきた。図書紹介の本筋から外れるが、思い出の断片を紹介させていただく。

唯一の文集『黄色いテント』や没後刊行(ポストテーム)の『山は魔術師』の編集過程では、気難しいと言われていたその人との何十回もの折衝で、そういう面につづかつたことは一度もない。編集側の要望にも対応は常にかで好意的だった。

『黄色いテント』には、テントを切り裂いて表紙に使った85部の特装限定版があるが、限定版にお決まりの番号を入れる話の時、その世界では4(し)、9(く)、42(しに)などの番号を忌み嫌って避ける(欠番にする)場合があり、その当否を尋ねたことがある。答えは笑殺だけであった。一方、東京の古

書店の昨秋のカatalogでは、定価2万円のこの限定版に28万円という値がついていた。妥当かどうかはともかく、こういう状態には田淵行男氏の眉間に皺が寄ることはたしかだ。

本書第六章「山岳写真と生態写真」にある山岳写真論争では、私は当時その雑誌企画の編集担当だったが、そこでの核心の問題は、いまも花盛りの山岳写真を含めて風景写真一般の世界に足を踏み入れる以上、答えを用意しておかなければならないものであろう。この論争に田淵行男は距離を置いていたが、実際には陰の主役であった。その姿は本書に解説されている。またこの論争は杉本誠「山の写真と写真家たち」(講談社・1985年)に詳述されていて、そこでも「彗星のごとく現れ、消えることなく恒星となった」田淵行男は大きな場を占めて扱われている。

田淵行男の存在はいま半ば伝説化しているが、そういう時に多角的・重層的に捉えた評伝によって全貌が甦ったのはめでたい。

巻末に田淵行男記念館関係者による座談会が収録されて、周辺の状況を補足している。ほかに著作

一覧・参考文献・年譜があり、「モノクロームの山」「山のアルバム」「蝶の細密画」「雪形」のテーマでまとめられた口絵写真では田淵行男の世界を概観できるから、全体構成での編集の手際はきわめて適切。装丁・造本は「本作りも神は細部に宿る」(『山』2015年5月・840号)とする小泉弘さんの手によって丁寧で好ましいつくりになっている。

田淵行男は、自分のすべては本にある、と語っている。古書価格の高いその著作に眼を通すのには苦労があるが、この評伝を読み終えた後には田淵行男記念館に足を運び、著作と作品を味わっていたきたい。その世界を理解する最新刊『田淵行男が愛した安曇野 田淵行男作品集』がそこで販売されている。(大森久雄)

続 山頂涉猟

南川金一著



2015年11月
白山書房刊
A5判 268頁
2000円+税

著者は2003年に日本の2000m以上の山すべてに登った記録を『山頂渉獵』（白山書房）と題して出版した。会員ならそれ以前から著者が、区切りごとにこの会報に発表していた記事でその進捗ぶりは知っていただろうが、そうでない者は初めてその本で全貌を知らされて、大変な御仁がいたものだと言ふと、度肝を抜かれることになった。この場合、山の経験が深ければ深いほど度肝を抜かれたのである。

それから12年、無名峰でも著者の基準を満たす山格を持つ2000m以上の山28座に加え、1900m台の山183座をすべて登り終えた成果をまとめたのが、昨年末に出版されたこの続編である。

むろんそれらすべての山についての紀行文を載せるわけにはいかない。まず一般的な登路が見当たらない、名前も聞いたこともないような山ばかりが選ばれているのは正編同様である。

インターネットが普及して情報はますます増え、有名山岳などを検索すれば何十万件もがヒットしてしまう。ところが、それらの情報はいかに多かろうとも結局一つ

のことを異口同音に語っているに過ぎない。こんな時代にあつてはほかと重ならない情報こそが貴重なので、本に載せる山の選択にあたって著者はそこを重要視した。おのずと読者が限定されるのは百も承知の上であろう。

それにしても、ただ執念と言うしかないが、その執念は山頂を踏めば終わりではない。山に付随する諸々、たとえば歴史などを決しておろそかにせず文献を漁る。地元での情報収集を欠かさない。登った山を姿形良く撮るためだけにその近くの山にも登る。

この執念は、身近な母国のことよりは遠い外国のことを知っている方が尊ばれるといった、こと山岳界に限らず我が国に多々ある不可思議な風潮に対する著者の反抗にも発しているよう。

そしてこれは重要なことだが、本とするからには文章が駄目なら価値は半減どころではない。とかく自慢話になりがちな山の文章をそうさせないためには抑制された筆致で淡々と書く以外にはなく、著者の文章にこの品格があるのは特筆しておかなければならない。要するに鬼に金棒だったわけだが、

この鬼が山鬼なのは言うまでもない。
(長沢 洋)

日本山岳会北海道支部編 日本山岳会 北海道支部50年の あゆみ



2015年12月
日本山岳会 北海道支部
B5判 224頁
頒価 1200円
(郵送料込み)

昭和24(1949)年、全国10番目の支部として発足した北海道支部の半世紀の足跡をまとめた記念誌である。同支部は発足したものの4年間で消滅、16年間の「休眠状態」を経て、昭和44(1969)年に再発足している。したがって、昨年(2015年)を50周年として本誌を発刊したもの。

巻頭グラビアを、会員である水越武(弟子屈町在住)、市根井孝悦(函館市在住)の実力派山岳写真家両氏が飾っている。

大目次を追っていくと、

・巻頭言

- ・支部50周年に寄せて
- ・北海道支部創立50周年記念事業
- ・北海道支部50年のあゆみ
- ・北海道支部の事業のあゆみ

- ・自然保護に取り組む
- ・遭難事故と対策
- ・論評／随想／紀行
- ・年表

と続き、正味50年の支部の活動ぶり、その踏み跡が要領よくまとめられている。

支部活動のハイライトは、当会100周年記念事業の日本列島中央分水嶺踏査(1130km)と、それに続く「オホーツク分水嶺踏査」(350km)であろう。

「私が支部長会議で提案したところ、反対意見が多数表明され、これは困ったことになったと困惑してしまいました。そのとき、当時の新妻北海道支部長が『北海道支部は宗谷岬から白神岬までの約1000kmを実施します』と宣言されたのです。この一言で、流れが大きく変わり、とにかく各支部でやれるだけでも挑戦しようとの結論が導かれたのです。」と「巻頭言」で森武昭・前会長が綴られているように、「中央分水嶺踏査」は、同支部の牽引力に負うところ大であった。

同踏査が終了した翌2007年5月、余勢を駆って「オホーツク分水嶺踏査」を開始する。ところが好

事魔多し。同年11月23日、上ホロカメツク山での冬山訓練中に雪崩のため4名の会員を失うという痛恨の遭難事故が発生する。

支部にとって大きなダメージだったがそこから再起、2011年2月、4人の遺志を継いで「オホーツク分水嶺踏査」を再開する。三国山から知床岬の末端に到達、最後に羅臼岳に登頂して完全踏査に成功したのは、2014年4月のことだった。

そして、夢は千島列島からカムチャツカ半島の山々へと続き、「環オホーツク分水嶺踏査」を目指すという。そのほか自然児学校や高山植物盗掘防止パトロール、支笏湖復興の森づくりプロジェクトなど、タレント(才能のある人)ぞろいの北海道支部だけに、その事業展開は多岐にわたっている。

●本書を購入ご希望の方は左記にご連絡ください。

〒004-0004 札幌市厚別区厚別東4条4丁目4-13
長谷川雄助(会員番号6103)

TEL 011-898-0702

✉ 6726msg@com.home.ne.jp

(節田重節)

日本三百名山ある記

遠藤俊一著



2015年8月
私家版
A4判192頁
3000円(税込)

まず著者はこう述懐する。「山登りを始めて50余年が経つ。小学生の頃、近くの川や峠に出かけて魚や虫を捕って遊んだ体験が、自然に親しみ山登りをする切っ掛けとなった。大学に入ると仲間と一緒によく山登りをするようになった。卒業して古里の企業に就職すると、溜ったストレスを発散しようとして一層山に入り、そこで明日への活力をもらった。精神的に苦しい時は山が私を癒してくれた。」

当時は山頂に立つより山で遊ぶことを求めた。「深田百名山」は昭和41年に買い求め折に触れて読んだが、全部登ろうとは考えもしなかった。しかし企業活動で染みついた目標管理の意識が、不知不識のうちに私の山登りの世界にも入り込んでいた。多くの峰々を登っていくのにつれ、自分も深田百名山を登ってみようと思いついた。それは50歳の頃であった。それか

ら仲間と共に百名山を目標に全国を駆け回った。自らコースを調べ未知の山へ出かける憧れにも引かれた。こうして百名山を登り終えると今度は三百名山を目標とした。だがそれだけに集中して登ったわけではないので目標達成には半世紀余りを要した」

そんな訳で著者はいわゆる「ピークハンター」ではない。同じ山でもコースや季節を変え、天候不良のときは無理せず撤退して再挑戦するなどして、その山の奥深さが味わえるように配慮したと語る。改めて言うまでもなく、登山とは麓から自分の足で一步步登り、頂上を踏んだ後は同じように下ることである。

しかも本来、登山にはルールがなく審判も観客もない。衣食住もろともに行動し、露営や炊事は珍しくない。付きまとう困難に打ち克ち危険を避ける行為自体にこそ、登山者は喜びを見つける。一步步ずつ登りやつと登頂したときの達成感、体験しなければ絶対にわからない。そのときそこで登山者は新たな自己を見出す。高揚した境地、環境との融合、仲間同士の信頼が渾然一体となり込み上げ

てくる。

評者が本書に共感した^{くだり}件は多い。苦しい登りの後に登頂したとき、視界が一挙に開けて周囲に広がる山並みのパノラマの描写には、臨場感が溢れる。また、野獣との遭遇、幕営中に熱湯で火傷、木の根につまずき転倒して頭を強打、山小屋の美人の女将に再会したいなどの挿話には、著者の飾らない人柄がにじみ出ている。本書はそんな登山の半世紀にわたる足跡を紀行文に綴り、豊富な写真を随所に添えてまとめ上げた遠藤俊一氏の労作である。

遠藤氏はJAC越後支部会員、一峰会会長、新潟県山岳協会常務理事で環境省自然公園指導員も務める。今まで登山を続けてこられたのは二十代から登って培った体力、良き岳友と支えてくれた妻のおかげと感謝する。氏は古希を過ぎてでもなおかくしゃくとして体力増強に励む。三百名山完登は自分にとって一つの通過点、次は百高山雑誌『山と溪谷』2004年7月号掲載を目指すという。その飽くなき登頂欲に心からエールを送る。

(筑木力)

Climbing&Medicine・71

山と湯めぐり2 日光の光徳温泉

村上和子



二荒山神社の鳥居と男体山 小島守夫撮影

男体山(2486m)は日光・中禅寺湖北方にそびえ立つ日本百名山の1つ。明治5年までは女人禁制で、山岳信仰の山です。

その男体山近くに素晴らしい温泉がありますので紹介します。男体山の下山ルート(山頂から三本松に下る)にある光徳温泉です。源泉地は日光湯元。泉質は、含硫黄-カルシウム・ナトリウム・硫酸塩・炭酸水素塩温泉(硫化水素型)中性低調性高温泉で、美しいお湯の温泉です。効能には山行後にぴったりの筋肉痛・疲労回復・健康増進などがあり、そのほかにも動脈硬化・糖尿病・婦人病・皮膚病が拳がっています。

この温泉は空気に触れると、色が変わります。温泉を引き立ては透明ですが、次第に白濁、あるいは、アクアブルー、エメラルドグリーンに

変化します。

効能ももちろんですが、お湯の美しさへの感動は温泉好きをさらにアップさせることでしょう。感動も精神的な癒しという温泉効果の1つになると思います。

光徳温泉の日光アストリアホテルは下山途中にも近く、源泉かけ流しの温泉です。

日帰り入浴は食事付きとなっているようですが、山での満喫と温泉への感動を噛みしめるならば1泊もお勧めと思います。

また、登山口近くになりますが、中禅寺湖畔に建つ日光レークサイドホテルがあります。こちらも源泉かけ流しで、なおかつ日帰り入浴も可能です。源泉地はやはり日光湯元です。

美しい温泉は山行の思い出を一層素晴らしいことと思います。

最後に温泉の入浴5か条をご紹介します。

- その一 入浴前後には1杯ずつの水を飲むべし
- その二 入浴前には足先からかけ湯をすべし
- その三 頭に濡れたタオルをのせるべし
- その四 長湯せず分割湯をすべし
- その五 疲労回復には、ひざ下の温冷交互浴が有効なり

(ソムリエテキストより)



光徳温泉・アストリアホテル

なお、過去のコラムは次の手順でご覧になれます。ご活用ください。

日本山岳会ホームページ→日本山岳会の活動案内→委員会→医療委員会 <http://jac.or.jp/info/iinkai/iinkai.html>



平成27年度第9回(1月度)理事会 議事録

日時 平成28年1月12日(火)19時00分～20時35分

場所 集会室

【出席者】小林会長、吉川・大久保・山田各副会長、神長・佐藤各常務理事、中山・野口・落合・山賀・直江・星・谷内各理事、平井・重廣各監事

【欠席者】勝山・大槻理事

【審議事項】

1・準会員制度の導入等会員制度の変更について(吉川)

標記の会員制度の変更についてその経緯および概要について別添資料により審議した。(賛成13名、反対なしで承認)

2・平成28年度予算の基本方針について(吉川)

赤字解消に向けて収入増施策と

報告

経費節減施策について説明し、別添資料により審議した。(賛成13名、反対なしで承認)

3・入会希望者の承認

12名の入会について別添資料により審議した。(賛成13名、反対なしで承認)

【報告事項】

1・平成28年度通常総会の開催日等について(佐藤)

前年まで恒例となっていた6月第3土曜日の開催を、会場の確保が困難なため6月第4土曜日に変更し、会場を「TKP市ヶ谷」とする。

2・NMA会長からの連絡(佐藤)

NMAアンツェリン会長から、「従来NMAが行なっていた登山許可手続きを、すべてネパール政府に集中するという政府決定に対し、最高裁が停止命令を発出した。」との連絡があった。

3・長野県登山安全条例の公布及び施行について(佐藤)

長野県が登山安全条例を制定し、平成28年7月1日から施行される。

指定登山道を通行する場合は、

登山計画書の提出が義務付けられたが、違反者に対しての罰則はない。

指定登山道については、7月1日の施行までに示される予定。

4・大雪山国立公園「登山者のみなさまへ」大雪山グレード版の送付(佐藤)

大雪山の縦走ルートのグレード入り登山案内が、大雪山国立公園

連絡協議会事務局と環境省上川自然保護官事務所から発行され、希望者には5月以降、郵送される。

5・平成27年度第3回初級登山教室指導者講習会の開催について(大久保)

支部事業委員会主催で、3月5

～6日に、安藤百福記念自然体験活動指導者養成センターと黒斑山で開催される。

6・会報「山」目録の発行について(神長)

50号ごとに「山」の目録を作成しており、今年の3月号までの目録を作成する。

経費節減のため、HP掲載を中

心とし、「山」「HP」で周知し、希望者には有料で印刷物を送付する。
7・「山」1月号の発行について
 (神長)

【連絡事項】

1・第17回富士山写真大賞展の開催 1月1日(金)～3月27日(日) 河口湖美術館

2・2016年都岳連新春の集い 1月30日(土) 東京グランドホテル(港区芝)

3・第6回日本山岳遺産サミット 2月27日(土)13:30～インプレスグループセミナールーム(神保町)

【今後の予定】

1・平成28年度広島支部総会 4月9日(土)広島市 山田副会長出席
 2・第4回小島鳥水祭 4月16日(土)高松市 本部からの出席者未定(出席案内未着)

3・予算・事業計画等

・平成28年1月29日(金) 平成27年度事業報告・会計報告提出依頼
 ・平成28年2月下旬 平成27年度事業報告提出期限
 ・平成28年3月下旬 平成27年度会計報告提出期限

会員異動(1月分)

物故

該当者なし

退会

三枝守維(7519) 越後
 早川英夫(8273) 越後
 吉村洋子(10028) 京都・滋賀
 平澤利夫(10142) 信濃
 武田峯生(10583)
 掛水孝幸(13214) 北海道

ルイム目誌 1月

6日 図書委員会 山行委員会
 7日 常務理事会 YOUTH CLUB
 8日 資料映像委員会 九五会
 12日 理事会 山岳研究所運営委員会
 13日 スキークラブ スケッチクラブ
 14日 公益法人運営委員会 フォトビデオクラブ 山岳地理クラブ
 15日 日本山岳会再生委員会 YOUTH CLUB
 16日 ゴジュンバ氷河説明会 山の自然学研究会
 18日 総務委員会 資料映像委員

会 スケッチクラブ
 19日 支部事業委員会 スキークラブ
 20日 青年部 三水会 つくも会
 21日 マナスル登頂60周年記念事業WG みちのり山の会
 マウンテンカルチャークラブ
 22日 YOUTH CLUB フォトビデオクラブ
 25日 資料映像委員会 YOUTH CLUB
 26日 デジタルメディア委員会
 27日 学生部 遭難対策委員会
 自然保護委員会 麗山会
 28日 YOUTH CLUB
 公益法人運営委員会 学生部 山遊会
 1月来室者 420名

INFORM O R M インフォメーション

A T I N O

◆『木の目草の芽』120号を発行

自然保護委員会

自然保護委員会機関紙『木の目草の芽』120号(最新号)を発行しました。今号は、群馬支部自然保護委員の北原秀介氏による「インフラ建設と自然との共生」、下野綾子委員による「シカの高山帯侵入の要因」他を掲載しています。

購読申込み 川口章子

TEL 0471-46318721

✉ syuaki@pony.ocn.ne.jp まぐ。

ウェブサイトででもご覧いただけます。

◆第32回東北・北海道地区集会のご案内

日時 2016年7月30日(土)～31日(日) 秋田支部

会場 国民宿舎森吉山荘 秋田県北秋田市森吉字湯ノ岱14-1

TEL 0186-76123

34

費用 1万6000円

内容 《集会・懇親会》 7月30日(土)

午後3時～集会 3時30分～

記念講演・民族芸能6時～

懇親会 《交流山行》 7月31

日(日)

Aコース 森吉山登山

Bコース 赤水沢・桃洞滝散策

申込み ①会員番号 ②氏名

③性別 ④住所 ⑤電話番号

⑥交流山行希望コース

⑦交通手段を明記し、各支部

で「参加申込書」に取りまと

めて左記事務局へメール、F

AX、郵送でお申込み下さい。

〒010-0817 秋田市

泉菅本山岳会秋田支部事務

局 TEL・FAX 018-823-

2708 FAX atk@jac.or.jp

締め切り 平成28年4月30日(土)

会場の都合上先着60名とします。

各支部事務局あてにご案内を差

し上げております。

◆第15回東海岳人写真展

東海支部

国内および海外の山の写真や高山植物など、山と登山、自然を撮影した東海支部の支部員、支部友

会員の作品90点あまりを展示します。

日時 3月15日(火)～20日(日) 9時

30分～18時(最終日は17時ま

で)

場所 名古屋市民ギヤラリー栄

(名古屋市中区栄4-1-8

中区役所朝日生命共同ビル

8階)

入場料 無料

その他 皇太子殿下作品を特別展

示

問合せ先 東海支部 井上寛之

TEL 090-6590-6669

jactokaishasinten@gmail.com

◆「第4回小島鳥水祭」開催お知らせ

本部主催、四国支部主管の「第

4回小島鳥水祭」を香川県高松市

で開催します。参加無料で雨天決行。

締め切り 3月20日。

スケジュール 4月16日(土)

①10～12時 小島鳥水の顕彰碑が

建つ石清尾山(香川県高松市・

232m)の周回登山

②12～13時 讃岐うどんのお接待

③13～15時 碑前祭、「山の日」の講

演を予定

④17時～夕食会(会場：高松市の

喜代美山荘「花樹海」後、解散

申込み 小島鳥水祭のみか、夕食

会も参加かを明記して四国

支部へ FAX atk@jac.or.jp。ま

たは FAX 088-625-6

215にて。

申込み者には改めて詳細を通知

いたします。

宿泊希望者は「花樹海」に各自

が直接申込んでください。ただし

夕食会も出席される方は「夕食は

小島鳥水祭と同じ」と伝えてくだ

さい。花樹海 TEL 087-861-

5580)

平成28年度通常総会の日程および会場

例年、本会の通常総会は6月の第3土曜日に開催してまいりました。平成28年度につきましては、近年使用してきたJR四ツ谷駅前のプラザエフも含め、6月の第3土曜日に確保できる会場がないため、日程・会場ともに変更し、下記のとおり開催させていただきます。あらかじめお知らせいたしますので、ご予定にお組み入れいただければ幸いです。

日程：平成28年6月25日(土)午後

会場：TKP市ヶ谷カンファレンス・センター

(東京都新宿区市谷八幡町8番地 TKP市ヶ谷ビル)

◆編集後記◆

●谷口けいさんと日本山岳会の関わりあいは、2014年の学生部女子ムスタン登山隊に同行したのが始まりだ。登攀記録や能力のみならず、人間的にスケールの大きな人だった。どこにいても、誰とも揺るぐことのない自分をもち、相手とコミュニケーションを取っていた。その才覚と愛される人柄こそ、喪うのが惜しまれる。

●冬の到来が遅い今シーズン。2月になり早くも春の気配が濃い。このままでは雪山シーズンが早く終わってしまうのではないかと、いう心配以上に、今後の農作物への影響も危惧される。山のコンディションは例年通りでなくとも、いまのコンディションに合わせた、行先、遊び方を上手に選択し、楽しめるようにしたい。(柏 澄子)

日本山岳会会報 山 849号

2016年(平成28年)2月20日発行
発行所 公益社団法人日本山岳会
〒102-0081
東京都千代田区四番町5-4
サンビューハイツ四番町
TEL 東京(03)3261-4433
FAX 東京(03)3261-4441
発行者 日本山岳会会長 小林政志
編集人 柏 澄子
Eメール:jac-kaiho@jac.or.jp
印刷 株式会社 双陽社